

幼稚園における動物飼育の現状とその考察

岡村 はた, 小坂 薫, 当津 隆

幼稚園では実際どのような動物が、どのような意図の下に、どの程度飼育され、保育にどのようにとり入れられ、これを通して子どもがどのようなことを学びとったか、また、子どもがどのような動物に関心を示すかについて、幼稚園、各保育者に対して、アンケート調査をなし、結果をまとめ、それについて考察を加えた。

調査方法と対象

調査は奈良県、兵庫県の公立、私立の幼稚園 139 園を無作為に選び、アンケート用紙を郵送し、回収できたのは 88 園で、他は白紙すら返送されてこなかった。個人からは 136 名の返事をいただいた。なお、奈良県の幼稚園には天理幼稚園長宮林富子氏、兵庫県の幼稚園には 82 年度公立幼稚園長会会長山川はる江氏の依頼状を添えて、お願いした。両先生に対して感謝の意を表する。

なお、この調査は 83 年夏に行い、その結果の一部は小坂薫(聖和大, 1983 年度卒)がまとめたが、園全体のものは未統計であったので今回、岡村、当津がまとめ、ク

ラスのものと比較して、考察を加えて、新たに書き下したものである。

調査結果と考察

I 幼稚園のおかれている内外環境

あらかじめ幼稚園のおかれている位置について、A 住宅地、B 市街地、C 付近に水田がある、D 付近に山がある、E 付近に海があるの 5 区域にわけ、それぞれの幼稚園が何れの場所にあるか 1 つを選んでもらった。そして園内設備として、第 1 表のような条件を問い、結果を集計した。1 園について 2 個以上答えられたものも多かった。

この調査に対して全く記入のないものは 88 園のうち園の用紙の返ったものは 76 でそのうち 25 あり、32.9% に及ぶ。答のあったもののうち 98% が園内に何等かの起伏変化をもっている。これは園児の探究心を育て、運動機能の発達や、変化に富んだあそびの工夫など多くのことを学びうる空間として意義が大きいと考える。

第 1 表 園内環境区地域別による

園所在域	住宅地 28	商店街 13	水田域 28	山麓域 6	海辺域 1	合計 76	率(%)
園内にあるもの							
自然の山	2	0	3	0		5	6.6
自然の池	1	0	1	0		1	1.3
自然の斜面	1	0	0	0		1	1.3
自然雑木林草原	0	0	1	0		1	1.3
人工山	7	6	14	1		28	36.8
人工池	9	3	10	3		25	32.9
人工水溜	3	1	4	0		8	10.5
人工斜面	1	0	0	0		1	1.3
人工流れ	0	0	0	1		1	1.3
小学校共有	0	1	1	0		2	
「なし」と記入 全く記入ないもの	8	6	8	2	1	25	
何等かの起伏がある						71	90.0

第 2 表 各園の教育目標

園所在域	住宅地 28	商店街 13	水田域 28	山麓域 6	海辺域 1	合計 76	率(%)
社会	2	4	4	1	0	11	16.4
自然	5	4	10	0	0	19	28.4
言語	2	3	5	2	0	12	17.9
絵画	1	3	1	0	0	5	7.5
音楽	4	2	5	1	0	12	17.9
健康	12	7	14	5	1	39	58.2
宗教	3	1	1	0	0	5	7.5
意欲	0	0	1	0	0	1	1.5
安全	0	0	1	0	0	1	1.5
表現活動	2	0	0	0	0	2	3.0
総合	1	0	0	0	0	1	1.5
毎年変化 しつけ	0	0	1	0	0	1	1.5
知能	1	0	0	0	0	1	1.5
記入なきもの	7	1	1	0	0	9	11.8

謝 辞

1983年の夏、私たちの面倒なアンケートにお答をおよせ下さいまして有難うございました。今後とも何卒よろしくご指導、ご鞭達下さい。

岡村 はた, 当津 隆

II 各幼稚園がとくに力を入れている教育分野

とくに力を入れている教育分野について調査したところ、このような尋ね方自身さけるべきだとの御注意をいただいたものがあり、勉強になった。答えて下さった園は88.2%に及び、回収率が66%だから幼稚園の58.2%からの回答があった。2点以上に印をつけられた園をふくむがこれは当然のことであろう。最も多かったのは健康で58.2%、次いで多いのが自然、次いで言語、音楽、社会となっているが、返事をいただくことができた園は自然に力を入れている園が割合に多くなっている可能性が大きいことは充分考えられる。また、幼稚園の昨年度の共通目標として「子どもと自然」があった関係もあり平時よりも、現場には「自然」への関心が大きかったであろう年とも考えられるので、全体の趨勢はこれより低いだろう。

III 園として1年を通じて飼育している動物の現状

1. 種類と個体数

①鳥類を園で飼育している件数は合計144件で、平均1.89件で、すなわち1園につき約2種の鳥を飼育している。飼育率の高いものはセキセイインコ、ニワトリ、ジュウシマツ、ブンチョウなどである。園の飼育とあってホロホロチョウ、クジャク、キジ、オシドリ、カモなど、近所の人や園児の保護者が持参したものを教育的に利用しているという。

②シジュウガラ、キジ、オシドリ、カモなど日本の野鳥は飼育してはならないことになっており、偶然入ってきたものは元気になるまで飼育してもよいが、公の機関に届出なければいけないといわれている。ハトはドバト、デンショバトはよいが、キジバトは禁止されているから

種類については気を配る必要がある。

③哺乳類中、飼育件数の多いのはウサギ(58%)、リス(34%)、モルモット(12%)、水生小動物はカメ(45%)、キンギョ(37%)、コイ(34%)、ザリガニ(20%)となっている。

④陸生小動物の種類数は少なく、設備のあまりいらぬ動物に集中している。それはむしろ各クラスで飼育するのにふさわしいからであろう。

⑤ウサギより大きいものはなく、昔はヤギが飼育されたのに比べると、空間や飼料の都合で一般に小形になったのか。ヤギの乳の生産、利用というものは飼育意欲と結びついてよいという考えと、そうではないという考えがあり、筆者らも今の時代、幼稚園では強調しなくてよい点と考える。

⑥第5表は数の記入のあったものについて合計し、記入のあった園の数で割ったもので、園についての飼育率とその平均個体数を算出したものである。飼育率の高いものはセキセイインコ(79%)、ウサギ(58%)、カメ(45%)となっており、その他30%以上のものはリス、キンギョ、コイ、ニワトリなどである。最も多くの個体が飼育されているのはザリガニで平均31匹、次いでコイ、メダカ、セキセイインコ、キンギョがこれにつぐ。

⑦現在30%以上の園で飼育されている種類で、個体数の平均をとると、セキセイインコ(20)、ウサギ(5)、カメ(7)、リス(6)、キンギョ(15)、コイ(20)、ニワトリ(4)で、平均的幼稚園の園としての飼育平均である。

2. 園で飼育している動物の世話現状と意義

①76園中6園の無記入に対して81の答があり、このことは飼育動物の種類によりそれぞれ異なる飼育法(適当

第3表 1年を通じて園で飼育した動物①

地域	住宅地 28	商店街 13	水田 28	山麓 6	海辺 1	合計 76	率(%)
トウチンコウ	0	0	0	1	0	1	36.8
チャボ	3	0	2	1	0	6	
ニワトリ(ヒヨコ)	8	5	5	3	0	21	
ウズラ	0	0	2	0	0	2	
ホロホロチョウ	0	0	0	2	0	2	
キンケイチョウ	1	0	0	0	0	1	
クシヤク	2	0	1	1	0	4	
キジ	1	0	0	0	0	1	
ハト	1	1	1	1	0	4	
ジュウシマツ	8	3	7	2	0	20	26.3
ブンチョウ	3	0	4	2	0	9	11.8
シジュウガラ	1	0	0	0	0	1	
カナリア	2	0	0	0	0	2	
キウカンチョウ	0	1	0	0	0	1	
セキセイインコ	21	10	26	2	1	60	78.9
キンカチョウ	1	0	0	0	0	1	
アヒル	2	1	1	1	0	5	6.6
ガチョウ	0	0	1	0	0	1	
カモ	0	0	1	0	0	1	
オシドリ	0	0	0	1	0	1	

第4表 1年を通じて園で飼育した動物②

地域	住宅街 28	商店街 13	水田 28	山麓 6	海辺 1	合計 76	率(%) 何園が飼育しているか
イヌ	0	0	1	0	0	1	
ネコ	2	0	0	0	0	2	
ウサギ	14	7	17	5	1	43	57.9
モルモット	2	4	3	0	0	9	11.8
リス	9	4	11	1	1	26	34.2
ハムスター	2	0	1	1	0	4	
カメ	13	7	11	2	1	34	44.7
カエル	2	3	3	0	0	8	10.5
イモリ	1	0	0	0	0	1	
キンギョ	10	6	11	1	0	28	36.8
フナ	3	3	10	0	0	16	21.1
コイ	9	4	11	2	1	27	34.2
メダカ	4	2	3	1	0	10	13.2
ドジョウ	1	1	1	1	0	4	
カタツムリ	1	0	0	0	0	1	
ザリガニ	5	2	7	1	0	15	19.7
ウニ	2	2	1	0	0	5	
アゲハチョウ	0	0	1	0	0	1	

に子どもを参加させる)を行なっていることを示している。子どもと教師とが一緒になり世話をすると答えられた園の中には当然くわしくいえば当番制、はじめ教師と子どもと一緒にしてのちのみに任せる場合を含むと考えられるとすると84.3%が、ともに世話をしているということになる。

②餌についての答は43例あり、これも動物の種類によって異なるであろうが、個々の動物が何を与えたときおしいそくに食べるか、動物にも食物の嗜好の相異のあることを知り、動物の食性にはいろいろあることを体得するのである。また、小鳥においては穀類をどのようにしてつばむかはじっくりと観察させて、ジュウシマツはどうか、セキセイインコは……。餌を与えることにより情がうつり自然に弱いものを可愛がる習性が身につくことになり、正常な情緒の発達にプラスすることであろう。

③年長者のすることを年少者が見る機会を与えることは大切で、年少者はこれにより自分たちの出来ないことを年長者がうまくやることを見て、尊敬の念と希望とが養われ、また、他人の経験を自分の経験として生かし、家で試みるなどして向上してゆくのである。

④水替え掃除について触れたのは66%内外であるが、水を替えたり、掃除をすることは、その結果、動物たちの住環境を整えること、動物たちが健康に暮らすことができることを知り自分達の住の環境要因の整理の重要性を知る上においても大切な自然教育である。一方、もちろん、協同精神の涵養になることはいうまでもない。

3. 動物飼育の目的と理由

①第8表は園として飼育している動物について、その名をあげ、それを飼育している理由や目的について書いたものを、筆者らが表として整理したものである。1動物について、理由や目的を2つ以上書いたものもすべて数の中に加わっている。これによると飼育は目的よりも理由の方が強いようである。

②この中で、多くの人々が目的をもっている動物について多い方からあげると、ウサギ(28)、リス(19)、セキセイインコ(19)、カメ(9)、ニワトリ(チャボふくむ)(8)、コイ(7)、ウズラ(6)、カエル(6)、フナ(5)、ザリガニ(5)となる。何等かの理由によって飼いはじめたものを多い方からあげると、ウサギ(52)、セキセイインコ(45)、リス(27)、カメ(23)、コイ(15)、ニワトリ(13)、キンギョ(11)、ジュウシマツ(8)、インコ(8)、サワガニ(5)で、1~6位までは意義と理由について一致した生物が注目されていることがわかった。

③昔に比べると園で飼育されているものは小形動物に限られ、手数や経済、危険性などの要因が大きく働いていると考えられる。飼育禁止されている動物は園では飼

育されていないことがわかる(クラスにはあったが)。飼育が少なくなったことは、現在、動物園の普及やテレビなどで、野生動物を見る機会が増してはいるが、動物飼育の意義は自然領域以外にも広いことに注目したい。

④保育者側が目的飼育として考え及ばない点においても、子どもたちは毎日、その動物の生活を観察することにより、動くもの、美しいものへの関心興味を持続させることにつながり、将来、科学する心への芽生えとなるだろう。

IV クラスで長期間飼育している動物

1. 種類と件数、頻度

①143クラスに対して1年を通じて飼育した動物をもったクラスは88で、それぞれの種類について飼育したクラスの数を示したのが第9表である。

②クラスで1年を通じて飼育された動物の主なものはカメ(43%)、セキセイインコ(42%)、キンギョ(30%)、ジュウシマツ(20%)、リス(18%)、ウサギ(13%)、ザリガニ(13%)などである。一方、園で飼育しているものも7位までにセキセイインコ、ウサギ、カメ、キンギョ、ニワトリ、コイ、リスがあり、ニワトリ、コイ以外はクラスで飼育しているものの順とかわりがほとんどない。ブンチョウ、ウサギ、コイはクラスよりも園で飼育される率が非常に高い。

③各グループ別にみた飼育率で、地域により飼育率が異なるかをみたのが第10表である。最低30以上のサンプルがなければ云々できないが、とにかくこれによると回収率は海辺によいがこれはクラス数が少いので比較することはできない。住宅街と水田が近くにある区域では幼稚園の数が多く回収率65~70%であった。種類の上からは海辺では鳥類をよく飼育しており、小さいけもの飼育率は地域による差はなく、陸生小動物は飼育率が最低である。これによると海辺の環境は鳥を見る機会が少く、水生動物を見る機会が多いことと関係があり、計画的に園で飼育しているものと考えられる。

④水野寿彦によれば飼育に適する動物は鳥類ではニワトリ、ウズラ、ジュウシマツとなっており、近藤薫樹によれば教材としてニワトリ(チャボを含む)、アヒル、ハト、ジュウシマツその他の小鳥類としている。筆者らの調査によるとセキセイインコ(園では79%、クラスでは42%)となっており、かなりの差がある。ジュウシマツは巣の口が斜上しており中がよく見え、セキセイインコよりたしかに親の子育ての観察がしやすいので幼稚園にはよい教材である。しかし、増殖率はセキセイインコも高く、また美しい色のものが多いので結果からみれば多いのであろう。しかし、子どもがみて美しいものもよいが、じっくりと子育ての観察などは教師側がまず興味を

第5表 園として飼育している動物(個体数)

	件 園数 %	個体数		一園につき 最多個体数
		園数	匹	
ウサギ	57.9	4.79(165/34)	25	
モルモット	11.8	4.50(27/6)	10	
リス	34.2	5.58(106/19)	10	
ニワトリ類	36.8	4.05(81/20)	10	
アヒル	6.6	4.20(21/5)	10	
ジュウシマツ	26.3	9.12(155/17)	23	
セキセイインコ	78.9	18.72 (861/46)	100	
ブンチョウ	11.8	3.82 (23/6)	10	
カメ	44.7	6.77 (149/22)	30	
キンギョ	36.8	14.06 (239/17)	30	
フナ	21.1	7.22 (65/9)	20	
コイ	34.2	18.85 (377/20)	60	
メダカ	13.2	18.75 (75/4)	30	
ザリガニ	19.7	30.80 (154/5)	100	

第6表 園で飼育している動物は誰が世話しているか

地 区 別	A B C D E 計					
	28	13	28	6	7	76
記入なし	4	1	0	1	0	6
教師・管理人・用務員・園長・男子職員のみ	8	1	5	2	6	16
教師・管理人・子ども	1	3	0	0	0	4
教師・子ども	13	11	22	4	1	51
教師・子ども当番制(年長・年少・先生組合せ)	1	1	4	0	0	6
教師・子ども(はじめ一緒に、のちのみ)	1	0	0	0	1	2
子どもだけ	2	0	0	0	0	2

第7表 世話の程度をさらにくわしく

	A B C D E 計						
	1	0	0	0	0	1	
飼	教師が餌を持ってくる(当番制)	4	4	1	2	0	11
飼	子どもが餌を持ってくる(当番制)	4	2	4	3	1	14
飼	教師が餌をやっているのを子どもがみる	8	4	5	0	0	17
飼	年長者が餌をやっているのを年少者がみる	1	0	0	0	0	1
水	教師が水を替えるのを子どもがみる	3	2	1	1	0	7
水	子どもが水を替える	23	7	14	2	0	46
掃除	教師が小屋の掃除をするのを子どもがみる	4	3	10	3	0	20
掃除	教師と子どもが一緒に小屋の掃除をする	1	0	0	0	0	1
掃除	子どもが小屋の掃除をする	6	6	11	1	0	24

(第6,7表のA~Eは第1表の左から住宅地~海辺の村町)に相当する。

第9表 クラスで長期飼育する件数

動物名	地 域					計	ク	ラ	園
	住 宅	街	水あ 田の 畑が 町	山あ がる 近 村	海あ がる 近 村				
鳥 類	57 (37)	27 (12)	42 (29)	5 (5)	5 (5)	143 (88)	(%)	(%)	
ジュウシマツ	12	2	3	0	1	18	20	26	
セキセイインコ	12	6	14	1	4	37	42	79	
ブンチョウ	1	1	0	0	0	2	2	12	
キンカチョウ	1	0	0	0	0				
カナリア	1	0	0	0	0				
ニワトリ類	2	0	3	0	0				
アヒル	1	1	0	0	0	2	2	7	
合計 件 数	30	10	20	1	5				
小 さい けもの 類									
ウサギ(カイウサギ)	4	2	5	0	0	11	13	58	
モルモット	1	0	3	1	1	6	7	12	
ハムスター	6	1	3	1	0	11	13	4	
リス	2	5	8	0	1	16	18	34	
その他	0	0	0	0	0				
合計 件 数	13	8	19	2	2				
水 中 小 動 物									
キンギョ	10	4	10	2	0	26	30	37	
メダカ	7	3	1	0	0	11	13	13	
フナ	0	1	5	0	0	6	7	21	
ドジョウ	1	1	2	0	0	4	5		
コイ	1	0	1	0	0	2	2	34	
カメ類	13	8	13	2	2	38	43	45	
おたまじゃくし	2	2	5	1	0	10	11		
カエル類	0	2	3	0	0	5	6	11	
ザリガニ	5	0	5	2	1	13	15	20	
カニ(サワガニ)	0	1	1	0	0				
合計 件 数	39	22	46	7	3				
そ の 他									
カマキリ			1						
カブトムシ			1						

第10表 クラスで長期飼育している動物の地域別・類別割合

回収された事	住 宅	街	水田	山	海	平 均
鳥 類	36.6	25.0	23.0	10.0	50.0	28.8
小さいけもの類	15.8	20.0	21.8	20.0	20.0	19.2
水生小動物	47.6	55.0	52.9	30.0	30.0	51.1
陸生小動物	2.2	3.3	2.3	2.0	2.0	0.8
クラス単位の件数割合	2.22	3.33	3.00	2.00	2.00	合計件数÷クラス数

第11表 クラスで長期飼育している動物の飼育目的(88名)

飼育目的	件 数		クラスの 実 状		クラスの 理 想		件 数	動物 グループ
	135	%	件数	%	件数	%		
情緒面	21	24	-----		3	3	3	とり
	12	14	-----		7	8	7	けもの
	9	10	-----		19	21	19	小水生
自然教育	14	16	-----		2	2	2	とり
	12	14	-----		4	4	4	けもの
	8	9	-----		21	24	21	小水生
便宜上	28	32	-----		9	10	9	小水生
	15	17	-----					とり
	16	18	-----					けもの
生活の技術			-----					小水生
			-----		2	2	2	とり
			-----		6	7	6	けもの
		-----		13	15	13	小水生	
		-----		4	5	4	小水生	

第8表 動物飼育の目的と理由

目的と理由	ハムスター	モルモット	アンゴラ	ウサギ	ネコ	イヌ	リス	セキセイインコ	ジエウシマツ	インコ	ブンチョウ	キンケイ	ニワトリひよこ	キジ	チャボ	アヒル	クジャク	カモ	ウズラ	ホロホロチョウ	ハト	カメ	カエル	キンギョ	フナ	コイ	メダカ	カニ	ザリガリ	計
自然にふれるため				3			1										1					1	1						1	8
教材としてよい(習性、画材)				7			10	8							2	3	1	1				5	4	2	3	4	1	3		54
習性をみせるにより(観察)	1			1			4																		1				7	
卵発生、生命の誕生				3				6	1				1	3					3										16	
子育てをみる				4	1	1		1	1										1										9	
情緒の育成				5			2	2	1					1								2	1	1	1	1	1	1	18	
動物愛護精神の涵養							2	2	1	1				1					1			1	1	1	1				15	
行事のための購入																										1			1	
労働の大切さをしらせる				1					1	1																			3	
(計)	1			28	1	4	19	19	4	2			1	7	3	1	1	6				9	6	3	5	7	2	5	131	
飼育場所がないから持ってきた			1	4			1		3	3												1							13	
飼育しやすい			1	14			10	20	2	1			3	6	3				3			4	4	1	6	1	1	1	80	
興味あり親しめる			1	12			6	4	1				2						1	1		5	2	2	2	1	1	1	41	
きれい				1				9		1																			11	
かわいい			1	5			4	5							1							1	1	2					20	
危険がない			1	8			1	2														1	1			1			14	
遊ぶにより				7			4															7	2					2	22	
自然に入ってきた							1																						2	
教師、父兄、近所の人が持参			1	1				5	1			2	2	1	1	2				1		2	1	1	3				23	
子どもが持参(みせたい気持)							1	1	1	1	1						3					2	1	1		3	1	1	14	
(計)	1	4	2	52	1	1	27	45	8	8	1	2	7	1	6	4	3	4	1	1	1	23	1	11	3	15	4	1	240	

もち、適当に動機づけをしてやることにより可能になるであろう。計画的意図的動物飼育を保育の中にとり入れるならば保育における動物飼育の目的を基礎におき、そのうちいずれの目的を達成するにはいずれの種類がよいかの観点にたち、一覧表をつくり、その上で多くの目的を達するもの、重要なものから順にそろえて飼育していく必要があると考える。

⑤小さいけもの類は近藤によれば最も適しているのはウサギで、調査結果もウサギ(58%)、リス(34%)となっている。飼育している範囲の最も大きい動物で、採食、出産、育児の行動などもヒトと比べることができ幼児が興味をもち、発展性のある教材と考えられる。

⑥水生小動物類は近藤、湯本によれば、キンギョ、メダカ、カメとなっている。調査結果ではカメ、キンギョ、コイ、フナ、ザリガニで略一致する。水生小動物は教育的意図の下に飼育されている率が最も高い。

⑦陸生小動物が幼稚園で話題になることは少ないのか教育専門家たちの教育に適する動物としては上ってこない。この場合、短期間とは1ヵ月内外、長期間とはそれ以上をさすとすれば長期間飼育に適する陸生小動物も多いのである。昆虫は現在幼稚園クラス平均1%内外の飼育が行われているにすぎないが、現代地球上で最も適応分化した動物グループで、自然界を理解するには何れのレベルにおいても昆虫を抜きにしては考えられない。次に2、3の例をあげる。カマキリ、カブトムシの飼育であるが、カマキリはその観察のはじまりは、冬近い野山でみつけた卵塊の不思議な形にひかれて、部屋に持ち帰りその付着した枝のまま、空びんにさしたものをよく陽の当たる場所に置き、寒い冬中毎日皆で見ると、やがて春になり、その食パン状の卵塊から無数の小さい成虫と似た形の足をもった小虫が、しっかりとした足どりで出てくるところを観察する。この時、変化過程の事実を知ること以上に時間の長さが必要なことも体得できるであろう点で良い材料といえるだろう。また、カブトムシは、昔はその幼虫を手に入れるにも、クヌギ林に出かけなければならなかったが、今は幼虫が入手しやすく、その飼育方法もわかったので、幼稚園現場においてもとり入れられた。さらに進んで保育者は、これらの幼虫が野外でどんなところにひそみ、何を食べているかへの興味とそれを明らかにしようとする好奇心をもそその方向へ導き得るような知識と気持の準備をもちたいものである。もちろん、カブトムシの場合も幼稚園では餌を用意することはむずかしいので蛹を入手して、冬の間管理が主な作業となるであろう。

2. 飼育理由と目的

①飼育の理由として現在の実状は第11表左側に示した

が、88人の保育者のうち、飼育理由は情緒方面及び自然教育面の計76に対し、便宜上59となり、クラスで飼育している動物のうち44%が初期には無計画に入手したものである。

②88人の保育者のうち理想とする飼育目的を調査した結果は第11表右側に示される。この場合にも情緒面の発達を考える件数の方が、自然教育を考える件数よりも上まわっている。その差は現状が情：自=42：34に対して、理想は情：自=43：40である。これに生活の技術面の配慮が自然分野に属すると考えるなら、理想の方は情：自=43：69となり、ようやく情緒配慮より上まわることになる。

③理想と現実とを比較するとき、その動物グループ別にみてゆくと、鳥類は現実では $65/135=47\%$ であるに対して理想は $7/112=6\%$ となり非常に少くなる。これに対して水生動物ではその値が $33/135=24\%$ と $57/112=47\%$ となりその数値は理想において断然数値が上がる。

④この②と③との結果を比較すると、理想をみると鳥よりも水生動物の方が情緒育成によいのかというような結果が出ている。まだ、現実の方が矛盾が少ないのではないだろうか。理想についてのこのような矛盾した数値が何故出てきたかを考えると、子どもが興味を示す動物が、陸生、水生の小動物に多いということおよび幼稚園では情緒の育成が大切だという保育者の考えを直接結びつけたからであろうか。

⑤次段階として保育者にどんな動物がどのような目的に使われるのかを記述した結果をまとめたのが第11表である。しかし、この左側と右側とが必ずしも矛盾なく結びつくとは考えにくいし、もっと右側には他の小動物の名があらわれてもよいのではないと思われる。

⑥これらの矛盾はどこからきているのであろうか。その1つは保育者個々の側にあり、他の1つは経営管理上の側にあると考えられる。現在は入手の難易と飼育の難易とが、飼育動物の種類の設定をしているようで、科学的考慮を今少し、管理者側も保育者側もしてほしいものである。これも、保育者の自然分野へのしっかりした頭の準備がなくては実現しないことで、具体案が保育者の頭の中に矢継早に出てきてはじめて管理者もその意見を入れ、設備も充実され、それが保育現場にも生かされるというものである。

3. 動物飼育の世話は誰がするか

返事をいただいたクラスの数A37、B12、C29、D5、E5で、保育者のみでする場合($\frac{17}{500} =$)3%、子どもと一緒に($\frac{337}{500} =$)67%、子どもだけ($\frac{25}{500} =$)5%、

答のないもの $(\frac{125}{500} =)$ 25%である。

4. 動物飼育はクラスの保育にどうとり入れているか

①このアンケートは小坂が項目をあらかじめ設けて答えていただいたため、これ以上の内容表現されることなく終わった。空白にしておけば88人中、答のないものが多く出たかも知れないが、一方、もっと深い考を保育者からひき出すことができたのではないかと反省している。このうち、領域自然に直接関係のあるものは、餌をやったり、世話をすることにより、その動物をよく見る習慣が付き、気付いたことを話しあわせ、注意力を養う。そしてその中にはこの方面に伸びる子は伸ばすのに役立つと考えられる。

②保育者が日頃、領域自然に関して意見を持っていることが大切で、経済管理者側と無関係にクラスの机上や水槽には、保育者の独自の判断によりもっと変化に富んだ教材が並べられてよいはずである。もちろん、これと並行して、つねに自然の中で生きている生物をみる機会を作らなければならない。部屋の中での飼育はあくまでも補助教材である。

V クラスで短期間飼育している動物

1. 飼育動物の種類とその率

①143クラスのうち、短期間飼育に返答のあったクラスは136であった。水生小動物ではザリガニ、サワガニ、カエル(おたまじゃくしを含む)、メダカ、キンギョなどが多く、陸生小動物では蝶の幼虫、カブトムシ、テントウムシ、アリ、バッタ、カマキリ、キリギリス、スズムシなどが25%以上のクラスで飼育されている。飼育件数については地域差はなく、また、動物グループ別にも地域差はみられなかった。このことは園として飼育している動物に地域差がみられたのと大きく異なるところである。

②長期間クラスで飼育する動物と比較すると、鳥、けもの類が少い。これは、これらの動物が短期間の変化の少い動物であるから、当然のことと思われる。

③一般に水生小動物の飼育が多く、陸生小動物のそれが少い。これは水生動物の生息域は与えられた空間が分断されており、与えられた水槽から逃げ出すことがほとんどないが、陸生のもは、網や蓋をしておいても、思わぬすき間から逃げ出すことが多いので管理がしにくいためであろうか。保育者側の便宜上、クラスでの飼育が水生動物にかたよったとも考えられる。しかし、一方、立場をかえてみると、子どもは水辺が好きである。目的もなく子どもは短期間体の一部を水につけることが大好きであるところから保育者はこれを重視したとも考えられる。

④短期間クラスで陸生小動物を飼育しているのは全体の40%のクラスで、そのうち、多い種類は下記のようなもので、()内は陸生小動物全体の割合を示す。バッタ(14%)、カマキリ(11%)、テントウムシ(11%)、チョウ幼虫(11%)、カブトムシ(9%)、アリ(8%)、スズムシ(8%)、キリギリス(7%)となっている。以上のように昆虫が断然多いが、それにつぐのはオカダンゴムシ(5%)、カタツムリ(5%)となっている。

⑤近藤薫樹によれば、水生小動物、陸生小動物のうち、飼育に適するものはアオムシ、イモムシ、オカダンゴムシ、アリ、コオロギ、カマキリ、おたまじゃくし、カタツムリ、カメとなっており、一方、山内昭道によれば、カメ、おたまじゃくし、ザリガニ、アリ、アオムシ、ケムシ、コオロギとなっている。彼らの適していると上げた動物と筆者らの調査結果の種類とはかなり類似しており、保育現場では効果をあげていることが予想される。

⑥時代によって、子どものまわりにいる動物は少しずつ変化し、異なったものが増減しているので、20年も前の文献の適当だといわれている種類でも現在あまり親しまれていないものもある。しかし、飼育しやすいだけでは長い間どのような設定を行なって、幼児に何を期待するか、もう一歩進んで考えたいところである。すなわち、他の材料では得られないものをそれぞれの種類で体得させることである。たとえば、ザリガニの体は、幼児の手のひらや指の長さとの関係で、手頃のつかみやすい形状をしている。水からひきあげても多少乱暴に扱っても容

第12表 各クラスで長期飼育している動物の世話の様式

地域	住宅地	街	水田・畑	山麓	浜辺
返答数	37	12	29	5	5
先生のみ	4	0	5	8	0
子どもと一緒に	68	52	76	41	100
子どもだけ	5	7	5	8	0
答なし	27	41	14	43	0

第13表 動物飼育を保育面にどう入れるか

保育に入れ方	長期	短期
88クラス中		136
先生と一緒にみる	76	99
先生と一緒にみて、親しみをもって触れる	75	112
先生と一緒に気づいたことを話しあわせる	74	107
行動などを真似させる	50	95
先生がその動物について絵本などで知らせる	54	99
一緒にエサをやる	83	105
仲間と世話をする	82	106

第14表 クラスで短期間飼育している動物

動物名	飼育しているクラス					
	地 域 (返答クラス数)	住 宅	街	水村 田・ 畑が ある 町	山あ がる 近 村 に町	海あ がる 近 村 に町
	(56)	(27)	(37)	(12)	(5)	
鳥類	ジュウシマツ	4	3	1	0	0
	セキセイインコ	8	1	4	2	1
	ブンチョウ	4	1	1	2	0
	シジュウカラ	0	0	0	0	0
	キンカチョウ	0	0	0	0	0
	合 計	17	5	6	4	1
小さいけもの類	ウサギ	3	0	0	3	0
	モルモット	2	2	0	0	0
	ハムスター	5	3	1	1	0
	ハツカネズミ	0	0	0	0	0
	リス	9	2	2	3	1
	合 計	19	7	3	7	1
水生動物	キンギョ	36	13	6	13	3
	メダカ	32	13	5	10	2
	ヒメダカ	2	1	1	0	0
	フナ	22	12	1	7	2
	ドジョウ	14	8	0	4	1
	コイ	5	2	1	2	0
	イモリ	1	1	0	0	0
	おたまじやくし類	101	38	21	28	10
	カエル類	109	43	21	32	9
	カメ類	59	21	9	24	3
	カイ類	1	1	0	0	0
	ザリガニ	122	49	25	36	9
	カニ(サワガニ)	88	33	18	30	7
	ヤドカリ	1	0	1	0	0
	カブトエビ	5	2	0	3	0
	アメンボ	1	0	0	1	0
	やご類	22	13	2	5	2
	ゲンゴロウ	14	6	1	5	2
	ミズスマシ	10	4	1	4	1
	合 計	890	260	158	204	51
陸生動物	カタツムリ類	23	4	10	5	3
	ダンゴムシ類	25	11	8	5	0
	コオロギ類	6	1	2	2	1
	カマキリ類	52	23	7	16	4
	バッタ類	65	27	11	16	8
	キリギリス	32	8	3	13	5
	スズムシ	34	9	9	10	3
	ハサミムシ類	1	1	0	0	0
	コガネムシ類	2	0	0	2	0
	カミキリムシ類	3	1	1	1	0
	ゴマダラカミキリ	1	0	0	1	0
	カブトムシ幼虫	2	0	0	1	0
	カブトムシ	43	15	7	16	4
	テントウムシ類	52	30	8	9	3
	クワガタ類	5	2	2	1	0
	ホタル類	7	2	1	4	0
	トンボ類	8	1	2	4	0
	アリ類	38	15	7	10	4
	モンシロチョウ	19	9	0	9	0
	チョウの幼虫	51	29	4	14	4
	アゲハチョウ	5	4	1	0	0
	合 計	474	189	83	139	40
飼育割合	合 計	1199	461	250	354	93
	小鳥類	1.1	2.4	1.1	1.1	0
	小さいけもの	1.5	1.2	2.0	1.1	2.4
	水中小動物	56.4	63.2	57.6	54.8	41.5
	陸上小動物	41.0	33.2	39.3	43.0	56.1
クラス当りの飼育件数		8.4	9.3	9.6	7.8	8.3

易には死なず、幼児がさわるとびになんらかの動きで即応してくれる動物である。ザリガニの体は節が多く足も多くの節があり、触角も長く著しい。昆虫の仲間とはどこが違うかぐらいは、少しすすんだ子どもには、適当な観察点であろう。また、ザリガニは他のエビ、カニと同様に鰓呼吸であるから、時々水につけて鰓を濡らしてやることを忘れないようにするといったような材料個々に関する正しい知識を豊富に身につけて、あらゆる現場で適応的に対処し得よう保育者の頭の準備も必要であると考えらる。

⑦ 143クラス中95%で短期間に動物飼育したことがあるという結果が出ている。これを以って幼稚園現場そのままの数字とは考えにくい。この種の調査では返事がなかったクラスの方に飼育していないクラスの割合がかなり大きいと推測してしかるべきであろうと考えるからである。飼育計画は幼稚園のおかれている環境を考え、保育者自身が一年計画をたて、さらにまた、突発的に幼児が持ち込んだもの、あるいは自然に飛来した小さな昆虫に到るまで、時をのがさず、教材として利用するべきであろう。

2. 長期の休みにはどうするのか

この場合の長期とは春、夏、冬の休日をさすが、鳥類なら連続してなくとも毎日曜日も問題となる。小学校では当然、当番をきめて子どもたちが出てくるか、または適当に各自の家で分散して管理するかの何れかに結論がすぐに出るだろう。筆者らの調査では幼稚園現場では第15表のような結果が出ている。園で世話をするというのは誰がするのか、話し合うというのも結果的にその小動物が如何にあつかわれるのかわからない。また、自然にかえす、にがすというのは放した結果どうなるか話し合ったのか。今まで自分たちで餌を与えた動物をもとの住んでいた場所に逃がしてやることは聞えはよいが、野生でいた同じ種の他の個体と比して生存力が劣り、また、すむべき空間を求めて苦勞するであろうことを話し合えるかが問題である。

3. クラスで飼育する動物は誰が持参したか

子どもが家から持参したというのが60%となっている。この中には何らかの原因で家で飼育できないので、園で飼育してみたいという子どもの願いがあるだろう。また保育に協力して保護者が持参させたのも含むだろう。また、この中には子どもが各自、野外で採取したものを友達に見せたいので持参したというのがあるだろう。この場合はさきの2つの場合より教育的効果は大きいと考えられる。それはその子に例えばその虫がいた場所、虫が何をしてきたか、どのようにして採取したのかなど話さ

第15表 長期休みの動物のあつかい方

動物のあつかい	返答数	143クラス中の割合 (%)
先生が世話をする	64	45
子供がもってかえって世話する	51	36
自然にかえす・にがす	50	35
家庭にあずける	8	6
園で世話をする	5	3
話し合う	3	2
用務員さんにたのむ	3	2
子供が当番で世話をする	2	1

(2つ以上答えた方もある)

第16表 材料持参者の地域別件数と割合

地域	材料持参者						
	住宅 (55)	街 (27)	水田 (37)	山 (12)	海 (5)	計 (136)	
件数	先生	20	9	22	3	3	57
	子ども	55	24	37	11	5	132
	父兄	10	9	3	0	1	23
	その他	6	5	6	1	0	18
	合計	91	47	68	15	9	230
割合 (%)	先生	22.0	19.1	32.4	20.0	33.3	24.8
	子ども	60.4	51.1	54.4	73.3	55.6	57.4
	父兄	11.0	19.1	4.4	0	11.1	10.0
	その他	6.6	10.7	8.8	6.7	0	7.8

第18表 動物が死んだ場合の措置

死後のあつかい方	返答数	143クラス中の割合 (%)
1 話し合う	9	6
2 子供とどうするか話し合う	2	1
3 子供の気持ちを考えて話す	2	1
4 どこが好きだったか話し合う	1	1
5 お祈りをする	8	6
6 天国へ行くように話す	1	1
7 命の大切さに気づくように話す	8	6
8 何故死んだか話し合う	28	20
9 飼い方を話し合う	1	1
10 子供が気づく前に先生が処理する	10	7
11 子供が気づく前に火葬する	4	3
12 保健所で処理してもらう	2	1
13 お墓をつくる	57	40
14 うめる	52	36
15 お葬式をする	2	1

1～6 情緒の発達
7.8.9. 自然の分野
10. 11. 12. 社会的教育
13. 14. 15. 総合的

第17表 動物が逃げた場合の措置

	返答者数	逃げたときの措置	
		逃げたときの措置	返答数
a. 子供たちに知らせる	93	子供たちと何故逃げたか話し合う	76
		新しい動物を飼う	6
		子供たちと一緒にさがす	47
		その他	3
b. 知らせない	6	子供たちが気づくのをまつ	1

第19表-(1) 子どもが関心を示した動物

動物名	返答数	143クラス%	
鳥類	ツバメ	8	6
	セキセイインコ	2	1
	ニワトリ	2	1
	アヒル	1	1
	ひよこ	1	1
	クジャク	1	1
	小計	15	3.9%
小さいけもの類	ウサギ	39	27
	リス	36	25
	モルモット	3	2
	ハムスター	1	1
	小計	79	20.7%
水生動物	ザリガニ	91	64
	カエル	77	54
	カメ	18	13
	おたまじゃくし	10	7
小動物	サワガニ	3	2
	フナ	1	1
	ドジョウ	1	1
	やご	1	1
小計	202	52.8%	
陸生動物	カブトムシ	18	13
	ゲンゴムシ類	13	9
	バッタ類	11	8
	毛虫類	10	7
	カタツムリ	9	6
	カマキリ類	6	4
	幼虫類	4	3
	青虫類	3	2
	チョウ成虫	2	1
	クワガタ類	3	2
	カミキリ虫類	1	1
	セミ	1	1
	昆虫	1	1
アリ	1	1	
トカゲ	1	1	
コウロギ	1	1	
小計	85	22.6%	

せる。そして仲間が互にそれを聞くといった展開ができる。さらに、その他7.8%の中には、園外保育で採る、園庭でみつける、クラスでとりにいくが含まれている。本来はこれがもっと多くなればよいと考える。その理由は、おのおのの動物がどこでどのように生活し、季節はいつだったかなどということについて、クラス全員の共通の体験として、その後の教材の展開の基礎として用いることができるので、大きな前進のもとになると考えられるからである。もちろん、自然界の多様性と一貫性とを体得させるのが究極の目的であっても、幼稚園の段階では数多くあつかわないで、幼児の関心の深いものから入ってゆく。例えばキャベツ畑のモンシロチョウの最盛期にクラスで見にゆき、モンシロチョウ成虫の畑での生活ぶりを充分みさせてから、産卵行動に気付かせ、卵を産んだモンシロチョウはあとどうするのだろうかなどの問を投げかけたりしながら、卵塊を食草ごと持帰り、どのようにして飼育管理しようか皆で話し合うという展開順序で一度はやってみたいものである。

VI 飼育動物が逃げ、または死亡した時の扱い方

1. 逃げた場合の扱い方

143クラスのうち99クラスから返事があった。何故逃げたかを子どもと一緒に話し合う。そして飼育の工夫がなされる。また、動物は飼育箱自身が大自然とは異なるので如何に工夫してもその欠を補うことは不可能である。ある要素、例えば餌は充分与えられても、空間的物理的環境条件、生物同志の関係においても不十分な点が多いことを保育者は充分承知の上で飼育するべきである。

2. 死亡した場合の扱い方

生を観察しつづけることはやがては死に直面することを予期するべきで、飼育をしていくためには、生があれば死は必ずあり、この両方をとりあつかうのでなければ不自然である。その飼育する動物について、誕生、成長、生活、寿命等についてよく知り、死ぬことは土にかえり産卵は子孫を残し、種を存続させることに外ならない。個体の死と種の存続は何もむずかしい言葉で説明しなくても、子どもにも何となくわかるのである。植物も同じで草は枯れても種子を残してそれがまた生えることと同じだということぐらいいすすんだ子どもは感じとっているのである。人の社会でも、祖父、祖母の死に際して、普段、子どもがえらいと感じ、何でもできている父母が、大変悲しんでいる様子を見る時、死というものが大変な事だということに気付くであろう。そこで、ウサギは子を生み、ニワトリは卵を生むがやがて雛にかえる。動物の子が生まれて成長し、平均寿命(自然死ではない)について考え、老衰についても考える。1年で死ぬものや100年以上生きるものなどがあることに

気付かせ、死と生とを関連づけて、種の存続まで話が及べばよいであろう。また、墓をつくるのもよい。土にかえすことへの自然の行動である。原始人が理解できたことは子どもはかなり理解できる。花などを供えて葬ってやろうとする思いつきも子どもの中から出るだろう。そして次にまた、何を飼育しようか、今度はどんなことに気をつけ、どのようにして飼育しようかなど話しあつて自然に話を替えてゆくのがよいと考える。

第18表は飼育動物が死亡したときの扱いを記述法により返答をいただき、これを分類して表示した。143クラス中130人からこの項についての返答があり、2つ以上の答も混在し、延187件の答が得られた。死を如何に保育にとり入れるか、現場の保育者たちがそれぞれ苦心しておられることがわかる。ちなみにこの面での幼児教育に関する文献は少ない。

VII 子どもが関心を示した動物

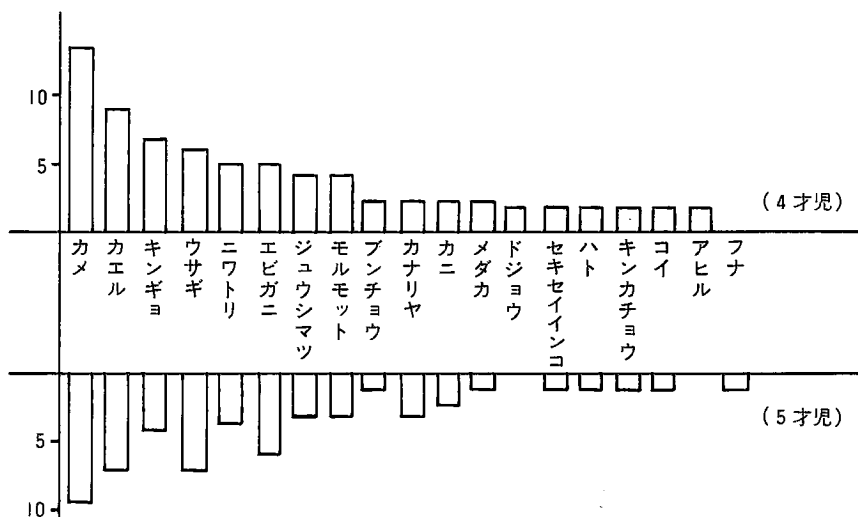
クラスを担当している保育者に、子どもが関心をよく示す動物名3個を記入していただき、まとめたのが第19-①表である。

①水野寿彦によれば4~5才の子どもの最も興味をもつ動物はガメで、カエル、キンギョ、ウサギ、ニワトリ、ザリガニの順になっている。これに対して筆者らの調査では、ザリガニ、カエル、ウサギ、リス、カブトムシ、カメとなっており、6位までのところで4種が共通している。水野の1位のカメは筆者らの結果では5位である。水野ではカエルとウサギの差は小さいが、筆者らの結果では大きくウサギはカエルの½程度にすぎない。しかし、水野にはリスがない。筆者らのウサギとリスを加えれば哺乳類に対する関心の度は水野の調査と結果的に似てくる。また、いずれの結果においても、水生小動物が50%以上を占めていることは自然界にそれだけ多く身近にあり、入手しやすく、保育現場に飼育しておきやすいことにもよるのであろう。

②つぎに水野の結果と大きく異なるところは水野では陸生無脊椎動物が全く上っていないことである。水野では18位までの動物名が上っているがこの範囲にはカブトムシはなく、筆者らの結果では5位である。身近にいる動物は時代とともに交替している。即応性のある、手ごろな大きさの入手しやすいものの中に今やカブトムシがあげられるのである。

③次にツバメは筆者らの結果では12位であるが、鳥類の中では1位なのである。一方、水野には18位までに鳥が7種あげられているが、ツバメは上ってこない。一方、現在、一般に園で飼育されている鳥にはかなりの種類があり、個体数も多く、広い空間が使われているにもかかわらず、それが子どもの興味をひき得ないでいる事実がこ

第19表-(2) 子どもが興味をもった動物



(「幼児の生活と自然」水野寿彦著、株式会社数学研究社、1976.6より)

こにある。また、一方、捕獲禁止のツバメは、街角や幼稚園の建物や子どもたちの家の一角の子どもたちが比較のみやすいところに巣をつくり、時には糞が頭の上に落ちてくるところなどにあり、春～夏の間、営巣、育雛行動を近よってみる機会が多いからであろうか。

④この表にあらわれた以外にも、野外に子どもを連れ出すことにより、保育者の思い及ばなかった動物に興味を示すこともあろうし、また、動物園につれていくところの結果はがらりと変わるだろう。今まで尋ねてきたことが「園内飼育」のことばかりであったので、何となく園内における子どもの興味をひくものに限定して答えられたのではなかったらうか。狭い思考の範囲に止まらず思いきって転換をはかりたいものである。幼児にとって、ひよこの孵化場の見学や、動物園でのニホンザルの行動の見学など子どもにもわかりやすく感動をおこさせやすい材料である。

Ⅷ 動物飼育により子どもたちは何を学ぶか

この項目では小坂があらかじめ項目を第20表のように13に限定して問い、必要な部分に印を記入する形で問うたものを統計した。

①情緒的な面が圧倒的に多くなっている。これは幼稚園教育要領にのっとり、現場の保育者は、その方面への関心を高めるように展開された結果であろう。しかし、保育しなかった者との間の比較 data があるわけではなく、保育者の願望を統計したことになると考える。

②この項を記述法にて問い答えられるようにすれば、

もっと経験豊かな保育者の意見が引き出せたであろうと反省している。この表は既製の書物の中から項目をひらき出したため、項目自身がいささか古いようであり、結果が既製の文献以上に前進することができなかった。現在に疑問を持たなければ現在以上に前進できないで終る。筆者らの考えは次項で述べる。

結論と要約

幼稚園で飼育するのにより動物について考えるとき、その目的は領域自然をとおしての人間形成であることはいうまでもないが、それが近い目的となると、初等教育の理科の目的を考えながら、その方向の思考の展開の基礎を作る時代であると考えられる。生物の成長は連続的であり、ゆるいカーブを画いて伸びてゆくものである。ヒトの子も例外ではない。初等教育の理科生物では、ヒト以外の自然に目をむけ、自然の中の生物をみることに、いろいろな生き物が互に関係しながら生きており、つねに変化していること、いろいろな生き物の中にも互に似た仲間やあまり似ていないものなどがあり、それらはどのようにしてできてきたのであるかを知り、それが何故そのようなになっているのかを考えさせ、さらに人と動物とのかかわりあいを知り、これから終生、人が自然と如何にうまく調和して生きてゆくかを体得する基礎をつくることにあると考える。

一方、低年齢の保育の中の領域自然のねらいとなると、健全な情緒育成に重点がおかれる。しかし、感受性の豊

第20表

	幼児の学習内容	返 答 数	143クラス中の割合(%)
A	動物をいじめたり乱暴に扱わない	96	67
A	動物への親しみや愛情をもつ	136	95
B	動物によって食べ物異なることに気づく	61	43
B	親が子を守り育てることに気づく	40	30
B	動物の成長によって習性のちがいに気づく	57	40
B	生き物についての様々な事実に気づく	99	69
C	世話の仕方が具体的にわかってくる	86	60
A・C	飼育することを喜んで手伝う	100	70
A	友達同志で協力して世話ができるようになる	104	73
B	疑問をもって自分で考えるようになる	66	46
C	飼育に必要な用具がわかる	43	30
C	用具の安全な使い方がわかる	37	26
A	動物への愛情が深まりいたわる気持ちをもつ	122	85

(2つ以上に○印をつけた方もある)

この表において

Aは情緒面(48.6%), Bは自然面(28.2%), Cは飼育についての事務面(23.2%)である。

かな人間を作るため、個々のものが澄んでいなければ実現できない。外界の個々のものをはっきり握みながら全体における関係の位置を感じとってゆくことが理想である。そして何故それがそうになっているかを自分なりに考えてみることである。動物の飼育はあくまでも補助的手段であり、室内で飼育している動物をみるときに、保育者はつねにその動物が野外にいるときの姿を連想して子どもの思考の中の欠を補うように誘導してやらなければならないと考える。

このような目的を達するために幼稚園ではどのようなものを、どう扱うか。その種類、観点について考える。

クラスにおける飼育は1年間を通じて飼育する動物も短期間飼育する動物も必要である。長期にわたり飼育する動物は鳥類、小さいけもの類、水生小動物のうち、それぞれ特徴が著しく、丈夫で危害のないものがよい。また、短期間飼育するに適する動物は水生小動物、陸生小動物で、生活や行動の変化の著しいもの、直接手でつかみやすいもの、また鳴く虫などがよい。種類についてはアンケートで上位にあったものが大体よいが、時代の変化とともに適する種類はかわる。地域社会とともに流動的にその種類の選択を考えるとよい。第21表はその一例である。

学問の発達の初期には、生物学では多様性のみを追求した。個体発生の初期にある幼児期においても多様性を知ることは順序である。あらゆることは個体発生は系統

発生をくりかえしているからである。しかし、その中でも将来の思考の発展をみこして、類似性、一貫性を知らうとする考えも少しずつ誘導するべきであろう。人が作った紙切れや道具を画いたもので、その共通点を抜き出すことも良いが、自然界にあるものでそれを行なうことはやがては自然界の正しい見方にもつながり、小、中、高、大学の教育の基礎ともなる。保育者自身、正しい見方、見せ方を体得し、準備し、保育現場に当るべきであろう。

子どもの質問の50%以上が人体と生物に関することである。子どもらが飼育動物や野外の動物を見ている間に疑問の言葉を発することがある。保育者はこれらをすぐとらえて、子どもの中の興味関心をくみとり、その場でさらに発展するような観察点への注意をむけるような言葉を投げかけてやるのが大切である。その場合、結論は決していわないことである。このためには保育者はかなりのことを確実に普段から頭の中に用意していなければならないであろう。結論は教えなくても結論を保育者が知っているなければ、その方向に誘導することはできないのである。「本に書いてあることは覚えなくてもよい」というようなことは、近時の保育者になろうとするものには当てはまらないと言っておいてもよいだろう。低年齢の教育には即応するだけの用意がねに頭の中になければ具体的な行動に移し得ないので間にあわない。子どもの疑問は断片的であり、瞬間利那的である。これをそ

第21表 クラスで飼育するのによい動物

期間	動物名	展開のポイント（自然領域中心）	時期
長期飼育するのによいもの	ジュウシマツ セキセイインコ	色や形、鳴き方、なき声、餌の食べ方、枝のつかみ方(とま務)子育て	年中
	ニワトリ ひよこ	品種を比較できれば全形、とさか、色、羽毛はどちらむいてついているか、歩き方、翼との関係、抱卵、ひよこの羽化、餌のとり方	年中
	ウサギ ハムスター リス	どんなものが好きで食べるか、食べ方(前肢の使い方)運動法、尾の用い方(リス)、耳の動かし方(ウサギ)	年中
	キンギョ メダカ フナ	品種を比較する、ひれ、体、眼など(キンギョ)鰭の形と使い方、餌の食べ方、食物の種類、どんなところに住むか(フナ、メダカ)	年中
	カエル おたまじゃくし	卵から何日ぐらいでかえるか、おたまじゃくし、何を食べるか、泳ぎ方、おたまじゃくし→カエル(何日ぐらいかかるか、外えら、後肢、前肢、尾の変化)カエル餌のとり方、運動法	4～7月
	ザリガニ サワガニ	外骨格、節がある、触角(ハサミ)の動かし方、どこに住んでいるか、何を食べているか、運動法(どの部分を使って移動するか)	4～10月
	カタツムリ タニシ	体の形と貝殻、どこに住んでいるか、何をどのように食べるか(歯舌、食痕)、タニシの子ども、運動法(水槽のガラスに這わせる)	6～3月
	カメ	かたい甲羅、危険なときどうするか、泳ぎ方、歩き方、呼吸法、何を食べるか、産卵、冬眠はどうするか	年中
短期飼育するのによいもの	カマキリの卵	冬にとってきて、(どこに行けばみつかるか)、クラスの中で適当なところにおき観察する。形、色などについて注意する(春、暖い日がつづく)と注意する。幼虫や蛹は冬の管理を忘れぬよう(湿気や温度)	10～4月
	トンボ類 やご	どこに住んでいるか、何を食べるか、(飼育には少数)、呼吸の仕方、食物の食べ方	6～10月
	カマキリ類 バッタ類	体の形・翅は脱皮ごとに長くなる(蛹なし)、翅や肢はどこから生えているか	9～10月
	キリギリス コオロギ類 スズムシ	どこに住んでいるか、どんな姿勢で鳴くか、何を食べるか(スズムシは年中飼う人も多いので入手しやすい)年中でもよい	9～10月
	カブトムシ	どこに住んでいるか、何を食べるか、飛びはじめにどうするか成虫(大つのはどのように使うか、とびはじめはどうするか)幼虫(飼い方を研究し、クラスで飼うのもよい)	5～7月
	テントウムシ類	どこに住んでいるか(幼虫はどこで何を食べるか)、翅の模様はいろいろある。越冬はどこで?敵からのがれるにはどうするか	6～11月
	アリ類	どんな生活をしているか(共同生活)。巣をもち、仲間をもち、世話をする。何を食べるか、巣の形はどうか(ガラス器で飼育)	6～9月
	チョウ、ガの幼虫 成虫	蝶蛾(成虫)の翅の色、大きさ、形、飛翔法、食物のとり方、(卵→幼虫→蛹→成虫)	4～7月

の都度とらえて将来の発展へとつなげてゆくためにはその場その場の即応が大切で、同じ場は再びやっこない。その場で適切な助言をすることによって、幼児の感動は深くなり、また連続させることが可能になるのである。外界のものにどのように感じ、どのように見てゆくべきかを体得した幼児は、その後の生活に領域自然のみならず、あらゆることに積極的な行動をとるようになると考えられるからである。

もう一つ、保育者として心にとめておきたいことは次のようなことである。近時幼児の身边から自然がはぎとられ、自由にふれ、あそぶ場がないことから、できるだけ自然の場に近い環境を設定し、そこで過す時間を持ちたいものである。

日本人は自然とつきあう方法が下手だといわれ、自然保護の考えが浅いといわれている。これは子どもの時から自然にふれさせ、動物を身近において生活することが少なかったために陥った欠点であるから、幼児期から動物と深くつきあうことにより、動物を特別視せず、人とともに自然界の一員で、われわれの仲間なのだとすることを、体を以て知らせてやるのが大切である。

それには先ず、幼児が興味や関心を示すものを取り入れることである。これは日常生活の中で接しやすいものである。カブトムシ、オカダンゴムシやザリガニは幼児にもすぐつかむことができ、すぐ反応する動物で、著しい外的特徴をもち、色が鮮やかで変化も著しい。その上幼児が遊びをつくりやすいことも大切である。これらを通して動物の性質や形態を知るだけでなく、自己の外の自然の存在様式を子どもなりに感じとることができるようになる。

次には当然情緒面の発達にふれなければならないが、美しいものには美しいと感じ、それが外にあらわされるように、可愛いものにはそれを感じ、それが外にあらわすことができるような環境づくりが大切である。これにより子どもの原体験が豊かになり、情緒が安定し、精神の正常な発展がのぞまれるのである。自然物に常に接していることで生物に対する幼児の見方、考え方が発達する中で、哺乳類の親子行動、鳥類の育雛行動の観察や、ウサギの子のしぐさ、イヌ、サルの子のしぐさをみせて子どもが自然のうちにかわいいと感じ、放っておかず、世話せずにはおかない心のかたむきをさそい出す場を設定したいものである。しかし、身近には可能なものはウサギ、イヌ、ジュウシマツ、セキセイインコぐらいであろう。

水野寿彦によると「生物に対する正しい愛情や愛護心は、童話などをとおして単なる情緒主義的な指導のみから育てられるものではない。幼児自らが生物に触れ、その成長の様子を目の辺りに見て、生物を正しく知る過程

で、幼児の愛情や愛護心は深まってゆくのである。」といている。個々の生物を見、生物同志の間の関係を観察し、自然界のあり方を知り、自然と人との調和の必要を感じ、将来大人として生きる上の自然観の基礎はまさにこの時代に培われるのであると考えるものである。

参考文献

- (1) 近藤薫樹監修 (1978) 幼児と自然 相川書房
- (2) 水野寿彦 (1976) 幼児の生活と自然 教学研究社
- (3) 湯本信夫 (1979) 領域自然の指導 ひかりのくに
- (4) 山内昭道 (1977) 自然の教育 フレーベル館